

## シベリアにおける仮面と狩猟儀礼についての覚え書

萩原 眞子

はじめに

一、シベリアにおける仮面の分布

二、仮装と狩猟儀礼

(イ) 狩猟での獣皮仮装

(ロ) エヴェンキ族の呪術的狩猟儀礼

(ハ) バレオアジア諸族の狩猟儀礼

三、獲物の像を所持して行なう狩猟儀礼

四、問題の所在——結論に代えて

はじめに

シベリアには仮面と仮装による儀礼をもっていた民族がある。広義の仮面には形態的にいくつかの種類が区別され

る。一は頭に冠したり、被るもの、二は顔面に装着するもの、三は頭にも顔にも装着することを目的としない小型のものである。この「マスコイド」と呼ばれる小仮面のなかにはエヴェンキ族に見られるように、シャマンの衣裳に縫いつけられるものがある。その他に、特殊なものとして木偶に仮面を付したものである。木偶はせいぜい二〇センチメートルほどの小さなもので、家族、氏族、狩猟の守護霊、病氣や野獣の霊などを表わす。

一般に仮面仮装の目的や意味は多様である。仮面そのものの性格、それが用いられる儀礼や舞踊などによって仮面仮装は本質的に異なる意味をもつ。死者に被せるデスマスクを別として（デスマスクの解釈にも異論はあるらしいが）、仮面は第一に装着者の正体を隠す。このことが第一義的に求められる場合には仮面はどんなものであってもよ

いはずである。例えば、コリャク族の白鯨送りの儀礼で用いられる草の面は、実際には「仮面」と称するには多少躊躇せざるを得ないような粗雑なものであるが、鯨の霊を恐れて女性が着用する<sup>(3)</sup>。第二には正体を秘すことだけでなく、仮面の表わす対象に自己を擬すことに一義的な意味のある場合である。例えば、狩猟の際に着用される陸獣や海獣の頭皮がこれである。獲物に接近する最善の策は猟師が獲物の一員と同じ姿になることである。このことは狩猟民の世界では広く認められる。そして、仮面仮装の第三の意味は仮面着用者が単なる擬装の段階を超えて仮面の表わす対象そのものに化身することである。自己の全存在をどのようににかかわらせるかによって化身の度合にはニュアンスの違いが生ずる。例えば、後述のエヴェンキ族の例に明らかのようにシャマンの仮面仮装には多かれ少なかれこうした化身の要素を看取できるし、また、化身の最高の極地に能舞台を想起することができる。

このような仮面仮装の意味は当然のことながら仮面を取りまく観念体系と密接な関連をもっている。コリャク族の女性が鯨の霊を恐れて顔を被う場合、白鯨は、狩猟対象であるという現実ばかりでなく、抽象的な「霊」の存在を前提とする宗教観念のなかに位置づけられていると言えよう。これと対比して考えると、獣の頭皮や毛皮をまとい

て猟獣に接近する擬装は、現実的な、単なる狩猟方法の一つであり、ここには何ら抽象化された観念は見出せない。仮面のもっとも原初的な形態はこの擬装にあると思われる。

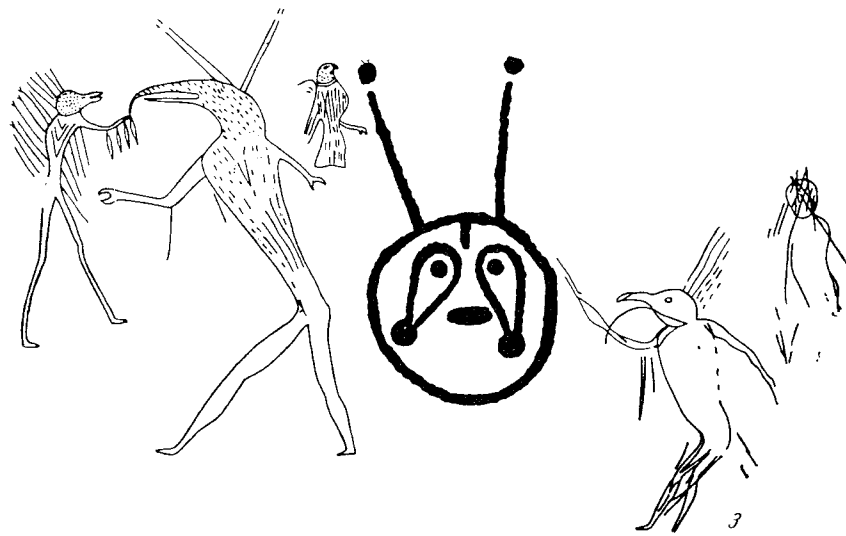
そして、狩猟儀礼のなかの仮面舞踊や無言劇<sup>（ジャスト・プレイ）</sup>には狩猟民的なより発達した観念、多少とも体系だった世界観の表現が認められる。例えば、シャマン自身が仮面仮装して重要な役割を演ずるエヴェンキ族のシンケラヴン儀礼では、すでにシャマニズムの世界観が舞台化されている。しかし、仮面仮装についてみると同じような狩猟儀礼のすべてにシャマンが介在し、シャマニズムの特徴が顕著な訳でもない。シャマニズムがシベリアの狩猟民にも極めて固有の宗教であるとは言え、初期段階の狩猟儀礼ではシャマンは必ずしも主要な、決定的役割を担ってはいなかった。大局的にはこの辺にもシャマニズムの成立を考える手がかりがあるように思われる。

本稿ではまず、シベリアにおける仮面の分布を眺め、次いで仮面と狩猟儀礼についてトゥングース・満州語系の諸族とバレオアジア諸族の資料を検討してみたい。

#### 一、シベリアにおける仮面の分布

考古学資料についてみると、シベリアで「仮面」と考えられる最古のものはミヌシンスク盆地のタス・ハザー墳墓で出土した砂岩板で、その年代は紀元前二千年紀初頭と比定されている<sup>(4)</sup>（図一）。ここには鳥頭の人間の姿が線刻されているが、この線刻画の解釈については「鳥の姿をしたシャマン」、「太陽神」とする説、「鳥の仮面を被った人間」とする説がある。この線刻画が鳥頭の特異な存在、つまり混成動物そのものを表わしているのか、あるいは鳥の仮面を着けた人間を表現しているのかを判断することは極めて難しい。たとえ「仮面と混成動物は結局は一つのもの」であるとしても、後述のように、どのような観念が鳥頭の存在と結びついているのかという問題にぶつかる。

考古学資料には別種の仮面がある。すなわちデスマスクで、これは同じミヌシンスク盆地のタガール期（前七—二世紀）の粘土と石膏製のものをはじめとして、タシュティク期（紀元初期の鉄器時代）にも相当数出土している。いずれも彩色されているが、なかには直接顔面につけるには大きすぎる、首や胸部まで表わしたものがあり、そうした「デスマスク」は墓室の壁に立てかけられていた<sup>(5)</sup>。



シベリアにおける仮面と狩猟儀礼についての覚え書（萩原）

シベリア東北部のチュコト半島では紀元三世紀の古ベリ  
リング期と推定される墳墓からエスキモの木製仮面が出  
土している。これに類するエスキモの仮面はアリューシ  
ヤン列島の十九世紀の墳墓やチュクチ民族管区のヤンダ  
イ遺跡(十一十五世紀)からも出土している。<sup>(8)</sup>

オビ・ウゴル諸族では中世に獸形の頭冠が用いられたこ  
とが考古学資料から明らかである。すなわち、ビザンチン  
やイラン製の青銅鏡や垂げ飾り、稀には銀皿に付された彫  
像で、そのなかには肩に熊の毛皮を羽織った男子像、前脚  
のぶら下った熊の頭皮を被った女子像、頭・翼・脚のつい  
た鳥の羽毛を着た人間像がある。<sup>(9)</sup>

この他に考古学資料としては岩絵の人面を挙げることが  
できるかも知れないが、資料が老大であることやその性格  
が必ずしも明らかでないため、ここでは岩絵を取り上げる  
ことは差し控えておこう。

民族学資料については、今日、次のような諸族に仮面の  
存在ことが知られている。すなわち、(一)シベリア東北部  
のバレーオアジア諸族—エスキモ、チュクチ、コリャク族、  
(二)トゥングース・満州語系のエヴェンキ、ウデヘ族。前者  
はシベリアに広く分布している。後者は沿海州の原住民。  
(三)西シベリアのフィン・ウゴル語系のハント、マンシ、ネ  
ネツ族その他、(四)南シベリアのチュルク語派のクマンディ

ン、シヨル、トゥヴァ族、(五)バイカル湖東部のモンゴル語  
派のブリャト族である。<sup>(9)</sup> こうした諸族に見られる仮面は多  
様であり、その用途、目的も多岐にわたっている。一般的  
に共通するものとしてシャマンの仮面を区別することがで  
きる。

エヴェンキ族ではシャマンが儀式で人面を装着する習慣  
はすでに十九世紀の半頃になくなっていったらしい。ただ、  
その名残りは病氣治療の儀式の際にシャマンが仮面を携え  
て行き、病人のいるテントの上座に安置しておいたという  
習慣に認められる。<sup>(10)</sup> 極東のナナイとウデヘ族にもシャマン  
が仮面を使用したという記述がある。ナナイ族では死者儀  
礼の一つとして、死者の靈魂を他界に送付する儀式カサで  
シャマンが仮面を装着する。これはシャマンが自分の正体  
を隠蔽するためであり、もし、仮面が顔から外れ落ちるこ  
とがあったりすると、シャマンは冥界から帰還することが  
できず死ぬことになる。また、死者の靈魂を封じ込めた木  
偶ムグデに仮面が装着してあったという記述もある。<sup>(11)</sup> ウデ  
ヘ族の大儀式には数十人のシャマンが仮面を装着して参加  
する。この仮面はシャマンの守護靈であり、病人のテント  
にいる悪靈を脅かして排除するという。<sup>(12)</sup>

クマンディン、シヨル、トゥヴァ族でも仮面はシャマン  
と結びついている。特にシヨル族ではシャマンが太鼓を新

様であった。

海岸コリャク族には春から秋までの海岸生活を終えて、  
冬の村に移動してから行なわれる「仮面装着」儀礼がある。  
これは「新月の後の最初の冬月」に行なわれ、夏の留守  
中、家の中に入り込んだ悪靈カラウを追いつくことを目的  
としている。仮面は「大きなワタリガラスとその家族」を  
表わすと言われるが、実際には男女の人面である。若者た  
ちが仮面を着けて各家に騒々しく闖入し、家内の隅々を点  
検した後、熊狩り、橇、橇競走など冬の生活の到来を象  
徴する様々な場面を演じ、家の主から砂糖、煙草、装飾品  
を受取る。<sup>(13)</sup>

また、ヴァロンコルフ湾のアリュートラ コリャク族に  
は耳に垂げ飾りのついた木面があり、子供たちが装着して  
無言で各家を訪ねて贈り物を要求する習慣があった。<sup>(14)</sup>

海岸コリャク族では白鯨送りの儀礼で特殊な面が用いら  
れる。これは仮面儀礼の木面とは異なり、スゲ科の草で作  
った粗末なベールの如き面で、女性が着用する。仕留めた  
鯨が海岸に近づき引き上げられる際に、女たちは踊りの衣  
裳と草のベールを着け、鯨を迎える歓喜を踊る。さらに、  
儀礼の主要な場面で呪文を唱える二人の女性が草のベール  
を着用する。それは彼女たちが白鯨の霊を恐れるからであ  
り、「肝っ玉のある」男は顔を被うことなしに白鯨の霊と

調する際の儀式で仮面が用いられたらしい。西トゥヴァ族  
のシャマンは一九二〇世紀には仮面を使用しなかった  
が、代りにハ—〇センチメートルほどの小仮面を帽子に  
結びつけた。二つ用いる場合には一つを帽子の前に、一つ  
は後部に付けた。<sup>(15)</sup>

ブリャト族ではシャマンは仮面や小仮面をもっていた  
が、その他にラマ教の儀式用仮面の発達が認められる。<sup>(14)</sup>

シャマンのこうした仮面がシャマンの装束とどのように  
関連しているのかという点は極めて興味ある問題である。

ウノ ハルヴァが指摘しているように直接関連あるものと  
しても、単に形態的類似だけでなく、その意味づけや機能  
的側面などの比較を踏えた考察が必要であるように思われ  
る。<sup>(15)</sup>

仮面仮装の無言劇はいくつかの民族に認められる。ハン  
ト、マンシ族では熊祭りで仮面仮装による無言劇が行なわ  
れ、狩猟の場面や獸の所作が再現された。古くは白樺樹皮  
で作った獸頭が用いられたらしいが、一九世紀には人面を  
使うことの方が一般的になっていた。<sup>(16)</sup> コリャク族でも若者  
たちが仮面をつけて熊狩りや橇競走を模して踊ったが、こ  
の無言劇は宗教的儀礼とは別に単なる娯楽として行なわれ  
た。仮面には男女の面があるが、いずれも装着して踊るの  
は男子だけであった。<sup>(17)</sup> これは先のハント、マンシ族でも同

直面する。<sup>(21)</sup>

その他、内陸部でトナカイを飼養しているいわゆるトナカイコリャク族には皮製の仮面がある。これは人喰いの面で女が被って子供をなだめるのに用いる。<sup>(22)</sup>これと同様のトナカイ皮の仮面がチュクチ族にもあって、やはり母親が被って、むずがり泣く子供をさらって行くという「ケレ」を装い、子供をなだめる。<sup>(23)</sup>

仮面が獣を表わしているのか、人間の顔をもっているのかという点は特に仮面の発達を考える上で重要である。ハント、マンシ族では、一九世紀には多くが人面であつたらしいが、獣面も存した模様である。そして、人面を装着して狩猟や動物世界が表現された。コリャク族の仮面は人面ばかりで、獣面はない。獣面の原型は獣の頭皮や毛皮そのものである。そして、実際にそのような仮面仮装が行なわれた。一つは狩猟そのものに際してであり、他は狩猟儀礼においてである。この点に関して、次に、エヴェンキ族やパレオアジア諸族の資料を眺めてみよう。

## 二、仮装と狩猟儀礼

### (イ) 狩猟での獣皮仮装

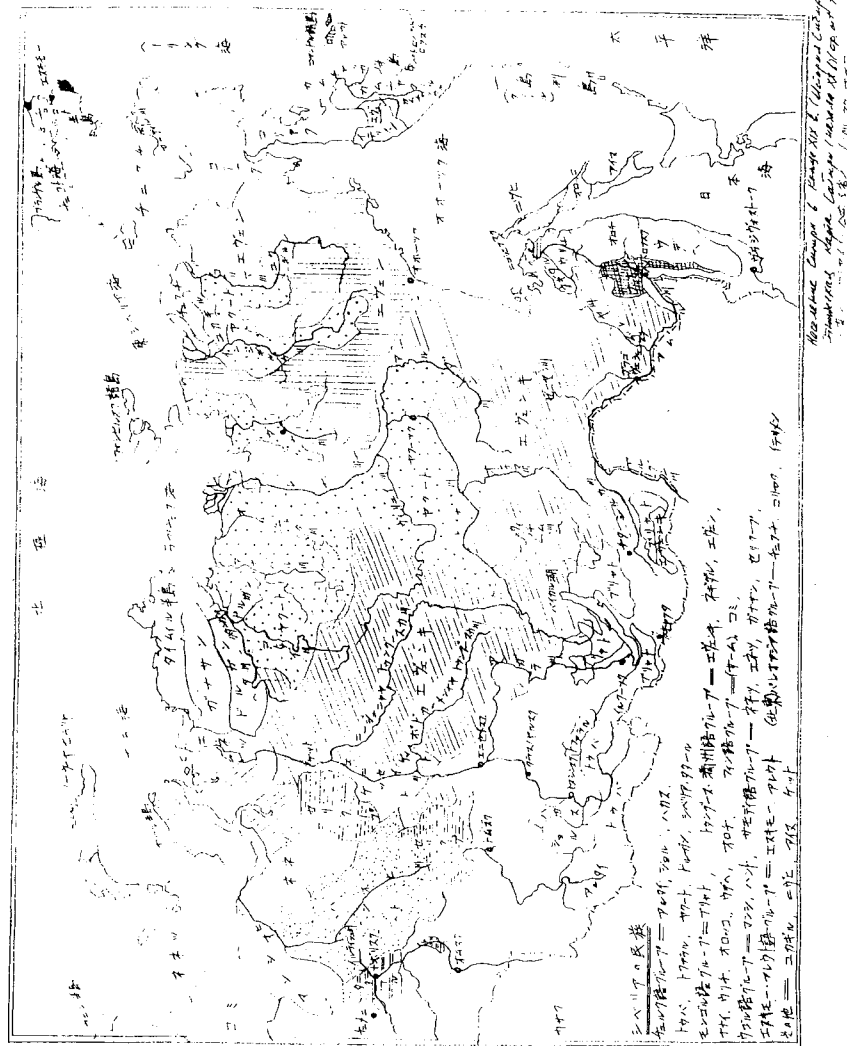
狩人が狩猟動物と同じ姿に仮装して獲物に接近するとい

う方法はシベリア以外にも広く認められるが、狩猟技術の未発達な段階や、身を隠しながら徐々に獲物に接近できるような遮蔽物のない原野とか雪原などの地理的条件のもとでは恐らくもつとも有効であつたろうと想像される。仮装という手段をもたないエヴェンキ族の猟師はアザラン狩りの儀礼に際して「自分が身を隠すガードの向うにアザランが現れてくれるように」と炉の火に祈願した。<sup>(24)</sup>

チュクチ族はアザラン狩りに際してアザランの頭皮を頭から被った。これはコリャク族でも同様に行なわれたらしい。<sup>(25)</sup>エヴェンキ族はトナカイ狩りの際にこの獲物の姿を借りた。一八世紀の旅記にはエヴェンキ族の狩人がトナカイの枝角のついた頭皮を帽子代りに被ることが記されている。さらに一九世紀でもザバイカル地方のエヴェンキ族が同様の、すなわち殺したトナカイから剥ぎ取った頭皮を被っていた。<sup>(26)</sup>ブリャト族もやはりトナカイ狩りには枝角のついたトナカイの頭皮を用いた。<sup>(27)</sup>

アザランやトナカイの頭皮による仮装はアラスカ エスキモーや一部のアメリカ インディアンにもあつたらしい。そして、アザランの木製の仮面があつたらしいことは注目すべきである。<sup>(28)</sup>

このように、もつとも効果的な狩猟方法としての仮装は、当然のことながら、自己を獲物と同じ姿に擬装するこ



シベリアにおける仮面と狩猟儀礼についての覚え書（萩原）

とを目的としている。そして、管見ではこうした性格の仮装対象はシベリアではトナカイとアザランに限られているようである。

#### (d) エヴェンキ族の呪術的狩猟儀礼

ところで、儀礼でなされる仮装はすでに現実的な擬装の段階を超えて、仮装者が仮装対象そのものに化身するという特徴をもっている。いくつかの地域のエヴェンキ族に認められるトナカイの狩猟儀礼「シンケラヴン」はその一例である。これは端的に言えば呪術的な狩猟の無言劇とトナカイ像の弓射から成る強化儀礼である。

ボドカーメンナヤ トウングースカ川のエヴェンキ族ではこの儀礼の一部始終は以下のようにであった。<sup>(29)</sup>

この儀礼はかつては氏族の全員により氏族の聖山で行なわれた。第一目にシャマンの儀式があり、その目的は聖山の麓で大地の女神を捜し出し、氏族の猟運を祈願することである。大地の女神はシャマンを世界もしくは宇宙の女神の許へ遣わす。彼女は獣の群の傍にいたる大きな雌オオジカまたは野生トナカイと考えられ、「エニンテ」（母さん）と呼ばれている。この女神の許可を得て、シャマンは皮作りの投げ縄（太鼓）を取り出し、獣を捕える。その獣をシャマンは氏族の狩り場、すなわち、シャマンのテントに連

れ帰る。

シャマンの叙唱を聴いている氏族たちが、連れ帰った獣だけでは不十分であるからもう一度宇宙の女神の所へ行くように求める。これはシャマンにとっては難題である。すなわち、女神から必要な数の獣の毛を盗み出さねばならぬいからである。シャマンは女神の許へやって来て、上衣についているシラミを取ることを申し出る。女神の老婆が同意して、上衣を脱ぐと、彼女の脇の下には宝の皮袋が頭になる。その中にはタイガに棲むあらゆる獣の毛が入っている。シャマンはそこから氏族の仲間に必要な数だけの毛を抜き取る。タイガに戻るとシャマンは盗んできた毛を払い落とす。毛はすぐさま本物の獣になる。翌日、氏族たちはタイガにシンケン（「猟運をもたらず護符」）を見つければ行く。

シンケラヴン儀礼の後半は、獲物を誘き寄せ仕留めるまでの過程を再現する参加者全員の舞踊である。参加者は特別な狩猟用の衣裳を着けるが、この際の帽子が獣から剥ぎ取った頭皮である。獣の頭皮を被って踊り手たち、つまり猟人たちは輪になりシンケレ（「猟運を求めに行く」という踊りを踊る。そして獣に対する即興の歌に合わせて獣の所作を繰り返す。輪舞の主役は獣群のリーダー役の踊り手であり、彼は踊りによって一種類の獣の群だけでなく、他の

諸々の獲物をも氏族の狩場に率いて来る。

この踊りが終ると参加者たちはタイガへ行き、サルヤナギとカラマツの若木を持ち帰る。それで叢林やタイガを作り、次いで木や白樺樹皮で象った鳥獣をそこに配置する。その間に老人たちは説話や氏族の伝説を語り続ける。

再び輪舞がはじまる。同時に雌オオジカの木偶の傍には仔ジカが、他の獣の傍にも沢山の幼獣の木偶が置かれる。舞踊は集団猟により獲物を射止める場面を再現する。すなわち、猟人たちはタイガへ出かけて懸命に獣の足跡を捜す。間もなく踊りのリーダーは足跡が見つかったと合図する。他の踊り手たちは獣の食べ残しや寝所を発見したところ、獣の群を見つけ、慎重に接近しつつあることを示す。射程距離まで来ると彼らは木偶に向かって矢を放つ。

この輪舞による呪術的狩猟が終ると犠牲のトナカイを殺し、その毛皮は長い棒に吊して最高神であるタイガの主エクスチェリに捧げ、肉は参加者全員で食する。

シンケラヴン儀礼の最後の部分はシャマンによる淨祓の儀式である。シャマンの指示により一本のカラマツが伐られる。その頂は人間の顔に似せて削る。下方は割いて両脚とし、横に棒を一本結びつけて両手とする。完全装備をした猟人たちがこの木偶の両脚の間を潜り抜け、わが身と狩猟具の悪霊払いをする。最後の一人が潜るとすぐさま両

シベリアにおける仮面と狩猟儀礼についての覚え書（萩原）

脚、すなわち木偶の裂け目は閉じられ、木の根で縛られる。これで猟人たちは悪霊の奸計を恐れずにすむ。何故なら、悪霊は猟人の跡を追って来るが、木偶のびったりと閉じた両脚にぶつかって通り抜けられないため、追跡をあきらめるからである。また、木偶が脚を開いて悪霊を通そうという気を起さないよう、横木（両手）に沢山の犠牲性毛皮を吊るす。これでシンケラヴン儀礼は終了する。

ボトカーメンナヤ トウングースカ川のエヴェンキ族における右のようなシンケラヴン儀礼はシャマンによる儀式と参加者全員による呪術的狩猟とによって構成されている。そして、後者では全員が獣皮一明らかにトナカイの枝角のついた頭皮と思われる一を被って輪舞し、それによって狩猟の経過を再現する。この呪術的輪舞にはシャマンが介在していないことも注目すべき点である。内容から見てこのシンケラヴンに類似する儀礼は他のエヴェンキ族グループやドルガン、バレオアジア諸族にも認められる。シム川のエヴェンキ族には歌と輪舞を中心とする八日にもわたるイケニブケ儀礼がある。<sup>(30)</sup>この場合、獣皮で仮装するのはシャマンだけである。イケニブケはエニセイ川以西では春、以東では秋に行なわれ、シム川エヴェンキ族では年一回の、春の大きな祭りで、エヴェンキたちは最高の正装をする。この儀礼の大略は次のようである。

イケニブケのために参加者全員を収容できるよう大きな天幕が設けられ、その周囲には人間や動物すなわちシャマンの守護霊の木偶が配置される。天幕の内部には炉の奥の側に柱が立てられる。これは最高神エクスエリヤその助手が降下するための梯子で、参加者はここに贈物をつける。儀礼に先立ってシャマンは参加者全員の清めの儀式を行なう。太鼓と歌でシャマンは儀式を開始し、火に獣脂をかざして、それで参加者の手首を十文字にする。「ヴァラ」という人の靈魂を殺す悪霊がそれを恐れる。次いでシャマンは最高神エクスエリと大地の女神を地上に呼び参加者各人の寿命や新年の獲物の数を告げる。

翌日、イケニブケ儀礼がはじまる。

第一日は「獣の覚醒」と呼ばれる。先ず儀礼用の衣裳に取りつけた金属部品を作るのに用いた道具と天幕の清めが行なわれる。次いで参加者はそれらの道具を手にして車座になり、シャマンの歌に合わせてシャマンの持ち物を作る動作をする。その後、全員が立ち上がり、「太陽の運行する円」に合わせて輪舞する。シャマンが一節を歌うと踊り手たちはそれを反唱し、一歩ずつ太陽が天を動く方向に進む。こうして夜半まで踊る。

二日目は「六つの峠」と呼ばれる。この日に初めて聖なるトナカイを見つけ、それを追跡する。朝から全員が天幕

に集って太陽方向の輪舞をはじめ。シャマンは歌の中で四季の移り変りを叙す。その間に聖なるトナカイは幼獣から成獣になっている。昼食時を除いてこの輪舞は夜半まで続けられる。昼食時に男たちは白樺、スギ、カラマツでトナカイの小さな木偶を四個作る。輪舞はトナカイが逃げないように「囲み」を作っておいてから終了する。

三日目は「真直ぐの長い道」と呼ばれる。この日は悪霊ヴァラが人間に襲いかかろうとする。シャマンと参加者がそれを追い払う。「山や浅瀬」を乗り越えて輪舞は夜まで続けられ、前日と同じに「囲み」を設けて終る。

四日目は「焼け跡の道」と呼ばれ、森林火事の焼け跡のなかでトナカイの追跡が続く。太鼓が再生されていれば、シャマンはこの日初めてそれを用いる。

五、六日目は「良い道」と呼ばれ、追跡が続く。この両日にシャマンの衣裳には新しい金属部品が結びつけられる。

七日目は「獣を手負いにする所」または「獣を追いつめる所」と呼ばれる。衣裳につける金属部品の作製に当たった男は皆、シャマンの大きな弓でトナカイの小さな木偶を射る。これは聖なるトナカイを狩りし、射止めたことを表わす。シャマンはトナカイの木偶を割って各家族に一片ずつ与える。この木片は翌年のイケニブケまで大切にしてお

き、その時に新しいものと交換する。

八日目は「脇に退く所」と呼ばれる。この日にシャマンの川の源に達し、さらに上界に到って、そこで最終的に仮想上の聖なるトナカイを射止める。シャマンは至高神の許に行つて話をする。戻つて来て、その話を仲間伝えると、イケニブケの儀礼は終了する。

以上のようなイケニブケ儀礼には明らかに異質の構成要素を区別することができる。ヴァン・レヴィッチはそれをプレシャマニズムの層とシャマニズムの層とし、前者には集団による獲物の追跡、獲物を殺して食べること(トナカイの木偶に矢を射り、その木片を保持する)、さらにこの儀礼が春に行なわれる新年祭であつたらしいことなどを挙げる。シャマニズムの層としてはシャマンの川の溯行、シャマンの衣裳や太鼓の新調、寿命や猟運占いを挙げて(32)いる。

このような狩猟儀礼は東のエヴェンキ族にも認められている。それは狼を確実なものにすることと獣群の繁殖を目的とし、同様の構成要素をもっている。すなわち、(一)シャマンの上界行き、(二)シャマンがトナカイに化して帰還、(三)トナカイ(シャマン)を投縄で捕獲する、(四)シャマンが身振いをして毛を落とすとそれがトナカイになる。(33)この儀礼がシム川エヴェンキ族の場合のように輪舞を伴っているかど

シベリアにおける仮面と狩猟儀礼についての覚え書(萩原)

うかは明らかでないが、多分、同様の状況を仮定してよいように思う。

ドルガン族にもシンケラヴンに類する儀礼がある。すなわち、(一)所作による獣の表現、(二)狩猟の無言劇(一人の男がトナカイの像をもって、本物のトナカイを真似る。二人の男が四つん這いになり、トナカイを追う犬を模す)、(三)獣の呪術的殺害(トナカイ像に矢を射る)、(四)獣の罅い込みを暗示する群舞(罅い込むことによって獣を逃がさないということだけでなく、猟運をも確保することになる。(34)草でトナカイ像を作り、それに矢を仕かける。草を一本ずつ猟の護符として参加者全員に配る。

以上、いくつかの狩猟儀礼に共通する特徴と考えられるのは、第一には参加者による仮装舞踊、第二には獣の像に対する弓射である。そこに表現されるのは獲物を追跡し、追いつめ、罅い込み、遂には仕留めて、肉を食べるという狩猟の全過程である。この呪術的舞踊には狩猟民の強い願望が如実に反映されている。シャマンの参与、そこでの役割は、ヴァン・レヴィッチも指摘するように本来的なものではなかったかも知れない。

参加者による舞踊という点から言えば、もう一つエヴェンキ族の豊猟と獲物獣の増殖を目的とするギルクムキ儀礼が挙げられる。(35)この儀礼も氏族の聖山の麓で供儀の後に開

始される。シャマンのために天幕が設けられ、その周囲にはシャマンの補助霊の木偶が配置される。シャマンは先ず補助霊を偵察に遣わし、獣の所在を調べさせる。補助霊は獣の居所、トナカイの群の所在を報告する。

そして、次に重要な場面がはじまる。すなわち、トナカイの群を氏族の狩場へ誘き寄せ、増殖をはかることである。そのためにシャマンは雌トナカイの姿になり、氏族の狩場へ雄のトナカイを導き入れる。他の獣もやって来る。

その後、参加者はシャマンの指示に従ってカラマツと白樺でオオジカと野生トナカイの像を作る。木偶はシャマンの天幕の傍に一定の順序に、交尾の姿勢で配置される。その脇でシャマンと氏族の成員たちはギルクという呪術的舞踊を繰り広げるが、これは明らかにさまに(特にシャマンについて)エロティックな性格をもっている。

豊猟と獣の繁殖を祈願するこの特異な儀礼でシャマンはどうやら枝角のついた頭冠を用いている。<sup>36)</sup>

#### (4) パレオアジア諸族の狩猟儀礼

チュクチ族には狩猟儀礼で獣皮を装着する習慣があったらしい。すなわち、黒熊、オオジカ、クズリ、狼に対してはトナカイに対するのと同様の儀礼が行なわれた。その基本的構成要素はトナカイの供儀、火に対する供儀、儀礼用

の料理、獣の頭を天幕に運び入れ、歌と太鼓で歓迎することである。多くの場合、この儀礼の最後には次のような特別な感謝の儀式が行なわれた。

家長は狼、時には黒熊に対する儀礼に際して「新しい毛皮を取って、それを頭には獣の頭皮が被さり、胴体の毛皮が背後にぶら下がるように身につける。狼の胴体が天幕の内に運び込まれる。狼の毛皮を着た家長は歌い踊り、太鼓を打って感謝の儀式をも行なう。時折、彼は狼の霊が自分の体内に入ったとして遠吠えをする」<sup>37)</sup>。

感謝の儀式の中心は歌と太鼓と舞踊であって、この時に家長のシャマンとしての技倆が余すところなく披歴される。それ故、近隣のシャマンも参加し、さながらシャマンの競技会となる。

歌舞が最高潮に達した時にシャマンが儀式に加わる。シャマンの身体には守護霊が入り、それが熊、ワタリガラス、狼である場合にはシャマンはその所作や鳴き声を真似る。「強力なシャマンは熊の毛皮で身を包んだり、ワタリガラスの嘴を顔につけ……一時的に熊やワタリガラスに変身してそのように振舞う」ということがあったらしい。<sup>38)</sup>

コリヤク族では熊と狼を射止めると、その毛皮を剥ぎ、着用して獲物の所作を模す儀礼があった。これは海岸コリヤクにもトナカイ コリヤク族にも共通していた。

死んだ熊が家に運ばれてくると、女たちが外に出て踊りと松明で迎える。熊の毛皮は頭をつけて剥ぎ取る。そして、一人の女がそれを見て踊り、熊が立腹しないよう、自分たち人間に対して親切であれと宥める。同時に肉を木皿に入れて熊に供する。翌日には熊に旅仕度をして送る。<sup>39)</sup>

海岸コリヤク族では狼に対して大略同じような儀礼がある。熊の場合と同様、狼を殺すと頭をつけて毛皮を剥ぐ。それから炉の傍に先の尖った棒を立て、それに一本の特別な矢を結びつけるか、もしくは地面に向けて矢の太い方を射る。一人の男が狼の毛皮を着て炉の囲りを歩き、一方では家族の他の者が太鼓を打つ。この狼祭りは「狼棒の祭り」と呼ばれる。

トナカイ コリヤク族に狼の毛皮を着用する場面があるかどうかは定かでないが、狼に対する態度は海岸コリヤク族と異なる。すなわち、殺した狼に対し、トナカイを犠牲にし、一晩中太鼓を打ち、踊って狼を宥める努力をする。<sup>40)</sup>

これは海岸コリヤクやチュクチ族の狼に対する扱いと対照的である。トナカイを飼養するコリヤク族グループにとっては狼はもっとも恐ろしい警戒すべき家畜の敵であり、恐らくはそうした現実が狼に対する異なった観念や態度につながるものと思われる。

このように、パレオアジア諸族における獣皮仮装による

シベリアにおける仮面と狩猟儀礼についての覚え書 (萩原)

儀礼は、エヴェンキ族における儀礼と異質のように思われる。儀礼の構成から見ると、前者には呪術的狩猟・輪舞と獣の像の弓射―の特徴が認められない。熊祭りも狼祭りもそれが行なわれるのはそれらの獲物があつた時である。すなわち、エヴェンキ族における儀礼がいずれも予祝的性格のものとするれば、パレオアジア諸族の獣皮仮装儀礼は殺した獲物の「送り」儀礼の一部であると言えないであろうか。ヨヘルソンはこれらの儀礼の意味が不詳だとしながら、トーテムズム儀礼との関連を示唆している。<sup>41)</sup>

ただし、獲物の像を弓射してその一部を食するという予祝的な儀礼はパレオアジア諸族では次節に見るような形で存する。

#### 三、動物の像を所持して行なう儀礼

ボドカーメンナヤ トゥングースカ川のエヴェンキ族のシンケラウン儀礼ではトナカイの木偶を弓射し、割った破片を参加者の各家族が狼運の護符として翌年まで保持するという要素が一つの構成部となっている。このような性格をもったシンケレ(ラ)ヴン<sup>42)</sup>はかつてエヴェンキ族の多くのグループに認められた。

ドルガン族でも、先述のようにトナカイの草作りの像を

弓で射り、その草を一本ずつ参加者に狼の護符として配る習慣があった。

カムチャツカ半島のカムチャダル（イテリメン）族には狼運の源として草作りの狼がある。これは十一月に行なわれる年一回の祓除の儀礼に登場する。<sup>(43)</sup>

この儀礼の当日の夜半近くに天幕のなかに背に草作りの狼を結びつけた女が入って来る。この草狼は儀礼に先だつて甘草と乾魚で作られ、天幕の屋台の上に置かれている。女が炉の周囲を這い回ると、その後から二人の男が甘草で縛ったアザラシの腸を持って追う。男たちはオオガラスのように鳴きながら腸で狼を打つ。女が炉の傍を離れるや子供たちが女に飛びかかって瞬く間に狼をずた／＼にする。女は出入口から屋外に出ようとする。ところが天幕の外で待ち構えている一人の男が女を捕え、天幕に引き戻し、逆さまに梯子から降す。この女を受取るうとして数人の女や娘が駆け寄る。前と同じように（「アルハラライ」と）叫び、皆で喚きながら地に倒れるまで踊る。（老人が）再び何ごとかを囁いて女たちを起こす間、大人は子供がずた／＼にした狼の草を食べる。

翌日には先ず炉の煙で屋内と参加者の清めがなされる。そして、今度は狼の像を使った儀式がはじまる。

梯子の両脇に二本の柱が立てられ、これに少年が縛りつ

けられる。天幕に入ってきた一人の老婆が少年たちに「お前たちの父親はいつ帰るのか」と尋ねる。天幕の中の全員が「冬に」と答える。老人がアザラシの脂肪を詰めて甘草で縛った腸を一本ずつ少年の前へ置いて天幕から出て行く。が間もなく戻ってきて喚き踊りはじめる。天幕内の全員がそれに和して喚く。

次いで草作りの狼を懐にした女が一人天幕内に降りて来る。この狼には熊の脂肪やアザラシの脂肪の入った腸、その他の食物が詰められている。女の後から手に弓を持った男がやって来る。両者の頭と手には削りかけが結ばれ、さらに、男の腰と矢にも同様の削りかけが付けられている。女が天幕の中を巡ると、その後から男や女たちが従う。そして、女が梯子に近づくと、数人の男が女の懐から狼を奪い取って、梯子を伝って天井近くまで上る。一方、女たちは梯子を取り囲み、上って狼を取ろうと死に物狂いになる。梯子を占領した男たちは女を寄せつけない。女たちは遂にへとへとになって地面に死んだように倒れる。その後、弓を手に離れて立っていた男が梯子に近づき狼を射る。男たちはそれを引きずり下ろし、切り刻んで食べる。熊の脂肪の一部は炉の守護神ハンタイの像に捧げられる。

この場面に続いて白樺の枝の輪くぐりがあり、参加者全員が清められる。

さて、このように草作りの狼や狼を射止め、食するという行為には、エヴェンキ族がトナカイの木偶を射て、その木片を保持するのと同じ意味あい、すなわち、狼運をもたらす護符の役割を認めることができる。そこには漁撈や海獣狩猟に経済的基盤をおくカムチャダル族にとって重要な獲物の豊饒と、満たされた生活への願望が直接的に表わされている。そして、注意すべきことにはこの儀礼も参加者による特異な歌舞を伴っている。

#### 四、問題の所在——結論に代えて

以上のような限られた資料から明らかなことは、獣皮もしくはそれに類する仮面仮装の狩猟儀礼が極めて多面的な性格をもっていることである。そして、儀礼の構成要素や担い手、内容、行なわれる場所などの点から眺めてみると、こうした狩猟儀礼が他の多くの民族誌的事実に関連し結びつく可能性を秘めているらしく思われる。

構成の点で、先述の例に認められる共通要素の一つとして歌舞、群舞を挙げることができる。どの儀礼においても参加者全員による歌舞は儀礼の主要な要素となっている。そして、これと平行して、あるいはこれを通して低音の如くにして狩猟儀礼のテーマ部が展開される。それを演ずるの

はシャマンであったり、家長であったり、数人の登場人物である。

このような性格の歌舞とのかかわりで興味深いのは例えばチュクチ族のセイウチ踊りである。これは一般に大きな祭りの最終日に行なわれる。ここでは男と女とがそれぞれ別に対峙して二列に坐り、「へ、へ、へ」と大声を出し、手を打ちながら。男たちはあたまを振り回すかのように時々腕を振り上げる。このセイウチ踊りには非常に単純化された形で狩猟場面が再現されているように思われる。カムチャダル族には同様の歌舞が狼、熊狩りに<sup>(44)</sup>してもあったらしい。

セイウチ踊りで男女がそれ／＼相対した時に、男性の側が狩人を表現しているのに対し、女性の側は果して何の役割を演じているのであろうか。さまざまな狩猟儀礼における男女の、殊に女性の役割がどのような性格のものであるかは、恐らくはその社会や時代の特質と少なからぬかわりがあるものと予想される。

一般に舞踊の起源についてはいくつかの可能性が考えられよう。そして、狩猟民世界に固有の舞踊——例えば動物模倣——があるとすれば、その発生の前段階に既述のような歌舞を伴う狩猟儀礼を想定できるように思う。

仮面の仮装者については、参加者全員の場合、単独の場合



(男女それぞれの場合がある)、さらにシャマンを区別できる。単独の男性がチュクチ族のように家長である場合もある。同じチュクチ族でも熊狩りの後の儀式で熊の頭皮を被るのは女性である。また、コリャク族では鯨や狼の草作りの像を担うのは女性である。このことも狩猟儀礼全体のなかでの女性の役割という観点で論ぜられるかも知れない。

シャマンが獣皮仮装するのはエヴェンキ族に典型的である。パレオアジア諸族ではシャマンが参加する儀礼においてさえ、どうやらシャマン以外の人物が仮装したらしい。こうした事情の違いにはエヴェンキ族とパレオアジア諸族におけるシャマニズムの特質の違いを勘案しなければならぬ。ただ、エヴェンキ族のイケニブケその他では明らかにシャマニズム的世界観を背景にした固有の儀式が一つの構成要素となっている<sup>(45)</sup>。従って、シャマンが獣皮仮装することは、すでにシャマニズム的コンプレックスと見なして良いかも知れない。しかし、確かなことは狩猟儀礼では獣皮仮装することが本来はシャマンに本質的な役割ではなかったということである。このことは先述の例の外に、例えばハカス族のシャマンの太鼓に描かれた図にも顕著である<sup>(46)</sup>。そこには太鼓を手にしたシャマンの傍に狼か熊かの獣頭をつけた群像が表わされている。その類例は考古学的にはゴルノアルタイ地方のスキタイ時代の石碑にも認めら

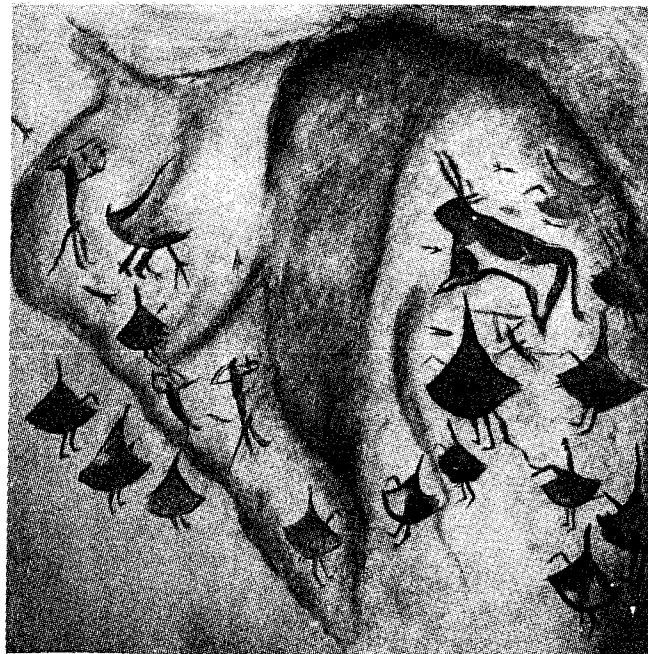
れる<sup>(47)</sup>。ここにはやはり太鼓をもつシャマンの両側に手をつないだ群像があり、そのうちの三人には異形の頭部がついている。

しかし、シャマンの獣皮仮装も起源的には古い。チュクチ族の感謝の儀式でも強力なシャマンが熊の毛皮やオオガラスの嘴を着けた。「最初のシャマンは熊皮の衣裳をもっていた。後になってこのような衣裳をもったシャマンはヘルギニクテケチ(下の世界の生れ)と見なされ、ウギニクテケチ(上の世界の生れ)のシャマンと区別された。彼らの衣や持ち物はオオジカもしくは野生トナカイの毛皮で作られた<sup>(48)</sup>」。シャマンの装束の起源についてのこの指摘は興味深い。確かにトナカイの枝角をつけた頭布はシベリアには極めて広く認められる。ところでシャマンの装束のもう一つのタイプとして鳥を表わすものがある。

仮面仮装による狩猟儀礼に果して鳥が登場するかどうか筆者の資料検索が不十分な目下のところでは明らかでない。先述のチュクチ族のシャマンによるオオガラスの嘴が唯一の例である。鳥の仮装を考える上で重要な民族学上の手がかりになると思われるのは、ウゴル諸族が鶴踊りの際に木製の鳥頭をつけた棒を手にしたという十八世紀の記録である<sup>(49)</sup>。これは布か外套を頭から被り、片袖に棒を通して棒先の鳥頭を袖口からのぞかせたものらしい。鶴踊り

がどのようなものであるかが明らかでないために、これをすぐさま狩猟儀礼として取り扱うことは差し控えなければならぬ。何故なら、シベリアの狩猟民世界で鳥類がどれほどの経済的比重を占めていたのかという現実的な問題と、もう一つは特にウゴル諸族の始祖伝説に半獣半人や鳥人が登場するからである。

一方、鳥の仮装が問題になるのは考古学的資料、すなわち、岩絵や洞窟絵画において鳥人像が一際特異なテーマになっていることと関連している。明らかに狩猟場面では鳥の仮装者が、それも多数、登場している例としてウズベキスタンのザラウトカマルの壁画(旧もしくは中石器—新石器時代)が挙げられる(図三)<sup>(50)</sup>。ここには実に珍奇な群像が描かれている。それはちょうど銀杏の葉に人間の脚をつけたような姿であり、葉柄が上、すなわち頭部とすると、扇形の葉が肩から膝のあたりを隠し、葉の中程から鉤の手状のものが突き出している。そして、壁画の人物像二十五のうち十九の像がその姿に描かれている。「要するにこれはマントの下から突き出た首の長い鳥の頭である<sup>(51)</sup>」とすれば、それは恐らくウゴル諸族が鶴踊りに用いた鳥頭の棒のようなものではないかと思う。そうとすれば、ウゴル諸族の鶴踊りもあるいは元来は狩猟儀礼と結びついていた可能性がある。それにしても、狩猟儀礼に何故鳥の仮装者が登場す



るのかという疑問は残る。すなわち、狩猟と鳥のかかわりの問題である。

考古学的にはもう一つ別のタイプの鳥頭人物像がある。それはヨーロッパのフランコ・ガンブリア美術で有名な鳥人像で、それに類する例がミヌンスク盆地でも発見されている。それは前二千年紀のものと比定されているが、三体の鳥人像の間には猛禽の類が描写されており、鳥人像はこれに類似しているように思われる。そして、その間にはさらに奇怪な人面が描かれている(図一)。

これらの単独の鳥人像については、それらが「呪師」であるかどうか、仮面仮装者であるのか、あるいはいわゆる混成動物の一種、つまり、そうした特異な存在それ自体であるのかという観点から考察しなければならぬが、やはり重要な点は狩猟と鳥のかかわりにあるように思われる。鳥が狩猟民の世界観のなかにどのように位置づけられているのかということ、シャマンの鳥の装束との間には何か有機的な関連がありはしないであろうか。

仮面の変遷を知る上でウゴル諸族の鳥頭をつけた棒は興味深い手掛りになる。ハントやマンシ族には同じような棒に藁を巻きつけ、十字の棒で角を表わしたオオジカがあり、頭からすっぽり布を被って手にその棒をもったらしい。このような仮装をした舞踊はどのような場合に繰り広

げられたのであろうか。仮装舞踊のなかには呪術的意義を失って、動物の所作を模倣することに重点がおかれ、演劇的效果の強い娯楽としての舞踊になったものもある。

さて、獲物である動物の仮装舞踊の呪術的意義とは何であらうか。獲物を発見し、追跡し、射止めるまでの狩猟そのものを再現するエヴェンキ族の場合には、それは現実的に「如くあれかし」という人間の強い願望を示す予祝的な類感呪術である。ブッシュマンのダチョウ踊りやマンダン族のバイソン踊りもその典型的な例として挙げられる。しかし、熊送りや狼送りの儀礼で殺して解体した獲物の頭皮を冠する踊りは、そうした群舞とは異質のものである。「仮面によって獣の霊は人々と共に儀礼に参加すると狩猟民は信じていた」のである。十九世紀にマンシ族は熊祭りに熊を模した白樺樹皮の帽子を被ったが、人面をつけてこの獣の生態を表わすバントマイムがしばしば演じられている。獣を表わす仮面が、いつしか人面に取り代る過程には獣の存在を現実視することと別に、その霊魂を想定する観念が介在しているように思う。すなわち、獣面から人面への移行にはアニミズムの観念の成立がかかわっているのではないかと思う。狼の仮装儀礼がチュクチ族とトナカイ・コリヤク族で極めて対照的なのも実はこうした観念のちがいに由来するのではなからうか。すなわち、一方では狼の頭皮

を被って太鼓を打ち歌舞に興じてこれを送るのに対し、トナカイ・コリヤク族は狼に旅仕度をせず、専ら狼の靈魂の有和に努める。コリヤク族にとって「狼が危険なのはその可視的な動物の姿においてではなく、不可視の人間の姿においてである。コリヤク族の観念では狼は豊かなトナカイ所有者であり、ツンドラの有力な主である」ばかりでなく、「強力なシャマンであり、トナカイに敵意をもつ悪霊であり、地上の到る所を徘徊していると見なされている」。こうした多分に人格的な狼の観念が生れたのはトナカイ・コリヤク族がトナカイ飼養に携わるようになってからであることは容易に想像できる。

仮装舞踊にはもう一つの効果、より心理的な効果があるらしい。獣皮をまとい獣になり切った狩人は些細にその動物の所作を真似る。そして「狩人は狩をする時と同じエネルギーをもって踊った。そして、この踊りのなかで心理的、身体的な準備がなされ、それによって彼らは実際に狩りを成功させることができた」のである。

最後に仮装舞踊の行なわれた場所について考えてみよう。チュクチやコリヤク族ではすでに明らかのように特別な天幕が設けられることはない。エヴェンキ族のシンケラヴン儀礼はかつては氏族の聖所つまり聖山の傍で行なわれた。詳細は明らかでないが、元来は氏族に固有の特定な祭

祀の場所があったものと思われる。このことと恐らく無関係でないと考えられるのは岩絵や洞窟絵画で仮装者や混成動物の描かれた場所である。例えば、ザラウト・カマルの壁画は洞窟入口の斜面にあり、容易には接近できない。ザラウト・カマルを含む付近一体の地域ザラウト・サイは「狩猟と信仰儀礼の場所であって、狩人たちの居住地ではなかった」。また、例えばラスコーの鳥人像のある場所は「洞窟の一番奥に近い」所で、「洞窟内の他の場所より低く、小さな岩壁で仕切られているので近づき難い」。こうした共通した状況の、特殊な場所に壁画があるというのは決して偶然ではないであろう。そこは特定の集団にとって儀礼や秘儀を行なう特別な場所ではなかったか。そして、もつとも疑問に感ずるのはそうした場所に人間が集まり秘儀を行ない、それだけではなく、さらにそれを壁面に描写したという事実である。描写するという行為の動機は何だったのか、そのことにも何らかの呪術的意味があったであろう。しかし、これはもうこの小論の枠と意図を超えた問題である。

## 註

- (1) アヴデーエフ、p. 41 p. 43 イヴァノフ、p. 19
- (2) イヴァノフ、p. 29
- (3) エヘルソン、p. 75

- (4) イヴァノフ、p. 19 フォルモゾフ、p. 114—p. 115
  - (5) イヴァノフ、ibid
  - (6) ギーディオ、p. 493
  - (7) イヴァノフ、ibid シベリアからは地理的に隔たるが、ドニエプル川とアゾフ海の間地域のカタコンブ文化(紀元前一五〇〇—二千年)の族長の墳墓からもデスマスクが発見されている。これは顔面に直接装着されており、赤色顔料で横線が塗彩されていた。これはキエフの考古学研究所副所長レ・ヲ・ゲーニング博士からの直接のご教示であるが、同博士によると、カタコンブ文化に先行するスキタイ文化にもやはり同様のデスマスクはあったはずという。
  - (8) イヴァノフ、p. 20
  - (9) イヴァノフ、p. 22—p. 28
  - (10) イヴァノフ、p. 25
  - (11) オクラードニコフ、p. 105
  - (12) イヴァノフ、p. 25
- ナナイ、ウデヘ族については、スモリヤク女史が民族誌やフィールド調査に基づいて、仮面の存在そのものについて大きな疑問を投げかけ、シャマンの仮面について否定的見解を明らかにしている。スモリヤク、一九七三年参照。
- (13) イヴァノフ、p. 27
  - (14) イヴァノフ、p. 27—p. 28
  - (15) ウノ・ハルヤ、p. 466—p. 467
  - (16) イヴァノフ、p. 21、p. 23—p. 24
  - (17) イヴァノフ、p. 23
  - (18) ヨヘルソン、p. 80—p. 81

- (19) ヨヘルソン、p. 82
- (20) ヨヘルソン、p. 67
- (21) ヨヘルソン、p. 75 このことと関連して、ヨヘルソンは、ユカギル族が死んだシャマンを解剖する際やアレウト族が死霊を恐れて木面を着用する例を挙げている。ヨヘルソン、ibid。
- (22) ヨヘルソン、p. 81
- (23) ボゴラス、p. 367
- (24) クレイノヴィッチ、p. 103
- (25) イヴァノフ、p. 22、図4
- (26) イヴァノフ、p. 24、アニシモフ、p. 30
- (27) イヴァノフ、p. 27
- (28) イヴァノフ、p. 22
- (29) 以下、アニシモフ、p. 28—p. 30 に従う。
- (30) アニシモフ、p. 30
- (31) 以下、ヴァシーレヴィッチ、一九五七年、p. 151—p. 159 に従う。
- (32) ヴァシーレヴィッチ、p. 160—p. 161
- (33) アニシモフ、p. 32 (ヴァシーレヴィッチ、一九三〇年による)
- (34) アニシモフ、p. 32—p. 33
- (35) アニシモフ、p. 33—p. 34
- (36) アニシモフはこのことと言及してはいないが、インフオーマントであるシャマン自身が描いたギルクムキの絵図にはシャマンの頭部に枝角が表わされている。アニシモフ、図三、

- (37) ボゴラス、p. 381
- (38) ボゴラス、p. 384
- (39) ヨヘルソン、p. 88
- (40) ヨヘルソン、p. 89—p. 90
- (41) ibid
- (42) ヴァシーレヴィッチ、1957、p. 165—p. 166
- (43) クラシェンニコフ、p. 204
- (44) ボゴラス、p. 410
- (45) ヴァシーレヴィッチ、1957、p. 161
- (46) 『草原のシルクロード展』 No. 111
- (47) クバレフ、p. 34、図1307
- (48) (46)と(47)の資料の群像についてはシャマンの補助霊とする解釈があるが、狩猟儀礼という見方も成り立つように思う。南シベリア、西シベリアの諸族の仮面と狩猟儀礼については稿を改めるつもりである。
- (49) ヴァシーレヴィッチ、1969、p. 238
- (50) イヴァノフ、p. 20—p. 21
- (51) フォルモゾフ、p. 64—p. 68
- (52) フォルモゾフ、p. 67
- (53) ギーディオ、p. 511、図345、p. 56、図343
- (54) フォルモゾフ、p. 109、図38C、3
- (55) ギーディオ、p. 507—p. 508
- (56) イヴァノフ、p. 21
- (57) コレヴァ、p. 106
- (58) イヴァノフ、p. 21
- (59) ヨヘルソン、p. 89

シベリアにおける仮面と狩猟儀礼についての覚え書(荻原)

- (59) コレヴァ、p. 106
- (60) アニシモフ、p. 29
- (61) フォルモゾフ、p. 64
- (62) ギーディオ、p. 508

# 文献

- アニシモフ A・F・一九五八、『エヴェンキ族の宗教』、モスクワ・レニングラード
- イヴァノフ S・V・一九七五『シベリア諸族の仮面』、レニングラード
- オクラードニコフ A・P・一九七一、『アムール川下流の岩絵』、レニングラード
- ギーディオ、S・(江上、木村訳)、一九六九、『永遠の現在—美術の起源』、東京大学出版会
- クラシェンニコフ S・(二七五五) 一九四八、『カムチャツカ地誌』、モスクワ
- クレイノヴィッチ E・A・一九七三、『ニヴフグ(ニヴヒ族)』、モスクワ
- クバレフ V・D・一九七九、『アルタイの古代石人』、ノヴォシビルスク
- コレヴァ E・A・一九七七、『舞踊の初期形態』、キシニョフ
- スモリヤク A・V・一九七三、『ナナイ族とウデヘ族の信仰における仮面の問題によせて』、『ソヴィエト民族学』第三号
- 『草原のシルクロード展』、一九八一—一九八二
- ハルヴィウノ(田中訳)、一九七一、『シャマニズム』、三省堂
- ヴァシーレヴィッチ G・M・一九五七、『エヴェンキ族の狩猟儀礼とトナカイ儀礼』、『人類学民族学研究紀要』、第十七巻、

史苑（第四二卷第一・二号）

- 一九六九、『エヴェンキ族』、レニングラード  
フォルモゾフ A・A・一九六九、『原始美術概説』、モスクワ  
ボゴラス・W・（一九〇四—一九〇九）一九七五『チュクチ族』、  
ニューヨーク  
ヨヘルソン W・（一九〇八）一九七五、『コリャク族』、ニュー  
ヨーク  
ロット||ファルク E・（田中、糠谷、林訳）、一九八〇、『シベ  
リアの狩猟儀礼』、弘文堂  
（国際商科大学助教授）